

6 自社資源を有効活用した作物生産や化学肥料低減の取組を通じ、良好な地域循環を目指す環境保全型農業（株式会社秋川牧園）

○ 株式会社秋川牧園は、自社農場で発生する畜ふんを自社堆肥施設で堆肥化。飼料用米や有機農産物の生産、化学肥料の低減、良好な地域循環を目指した環境保全型農業を実践。

■ 国内資源の種類 ■ 肥料の種類・肥料名称 ■ 取組の経緯・内容・成果（見込み）

- ・ 鶏ふん
- ・ 牛ふん

- ・ 種類：堆肥（特殊肥料）
- ・ 肥料名：グリーンコンポ

取組の経緯

- ・ 昭和47年創業以来、食の安心・安全に取組み、化学肥料を使わない自社資源を有効活用した農業生産を可能とし、環境保全にもつながる循環型の農業を実践。

取組の内容

- ・ 秋川牧園の自社農場で発生する鶏ふん・牛ふんを自社の堆肥施設で十分期間をかけて発酵を促進し、一部は鶏ふんと牛ふんを混合するなど良質な土づくり堆肥を製造。
- ・ ブロイラーの鶏舎にチップを敷き詰めて飼養し、出荷後、鶏ふんを発酵消毒、再度、鶏舎に敷き詰めて飼養する発酵床を活用した養鶏を実施。2～3年繰り返した後、余剰分を堆肥舎へ移し、切り返しを繰り返す事で完熟堆肥を生産している。
- ・ 資源の有効活用と化学肥料の低減を通じた良好な地域循環を目指し、自社畜ふん堆肥を自社の有機栽培利用だけではなく、グループ内飼料用米生産者への無償提供、県内外の有機農産物生産者への供給を実施。

成果（見込み）

- ・ 畜ふんの利用拡大により化学肥料の使用低減につながり、栽培コストの削減、地力の増進効果等、有機栽培農家の支援に寄与している。
- ・ 化学肥料使用量(尿素、一発肥料目安)については、飼料用米で鶏ふん堆肥導入（500kg～1000kg/10a施用）により半減（導入前 40kg/10a→導入後20kg/10a）、収量についても約3割増加。

■ 作物

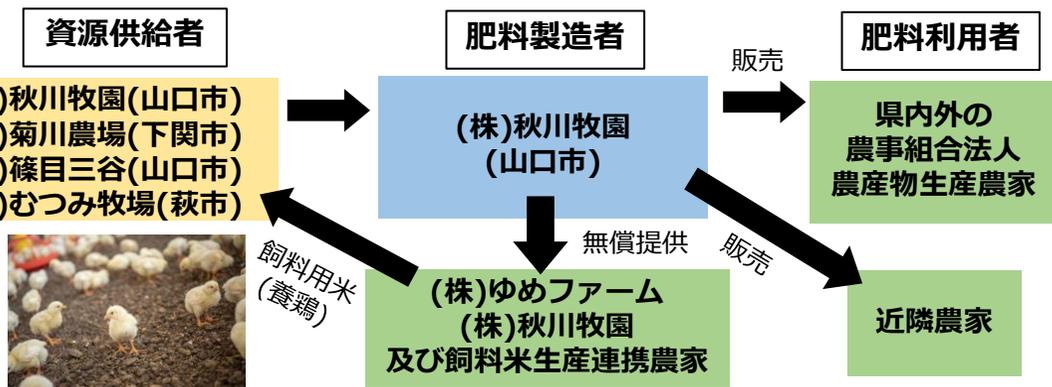
- ・ 水稻(飼料用米)
- ・ 野菜(有機栽培)
- ・ 麦(有機栽培)

■ 主成分の含有量(%）、特徴等

N	P	K	C/N
3.5	5.8	5.7	9

窒素、リン酸、カリ、さらには様々なミネラルをしっかり含んでいる良質な完熟堆肥

■ 主たる取組主体と肥料利用までの流れ



■ 今後の課題・取組

- ・ 堆肥の散布時期が限定されるため、供給量が増加すると大面積の保管用堆肥舎が必要となる。輸送費の高騰もあり、運搬コストも上昇、散布する人件費、散布用大型機械の運用コストもすべて上昇していることが課題。



堆肥製造施設